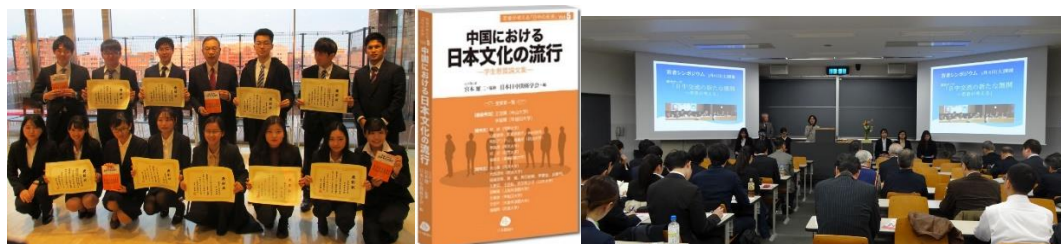


日本日中関係学会主催

2019年12月13日

「第8回宮本賞(学生懸賞論文)」応募87本 受賞者決定!



(左から第7回受賞者の皆さんと宮本会長、第7回受賞者論文集、受賞者による「若者シンポジウム」)

【学部生の部】最優秀賞：鈴木日和(スズキヒヨリ)さん(慶應義塾大学 法学部 政治学科2年)

「日本の若年層を中心とする対中世論改善の可能性」

【大学院生の部】最優秀賞：該当なし

優秀賞：劉毅(リュウキ)さん/盤大琳(ハンダイリン)さん

(中山大学外国語学院日本語言語文学研究科修士課程2年)

「中国における2020年東京五輪に関するネット世論の研究

—ウェイボー内容の感情分析に基づき」他2本

日本日中関係学会(会長：宮本雄二・元中国大使)が主催して「第8回宮本賞(日中学生懸賞論文)」を募集(2019年6月から募集開始)したところ、日本ならびに中国各地から「学部生の部」で54本、「大学院生の部」で33本、合計87本の応募がありました。

2019年12月13日(金)に宮本雄二審査委員長など審査委員が集まり、厳正な審査を行った結果、「学部生の部」の最優秀賞に、鈴木日和(スズキヒヨリ)さん(慶應義塾大学法学部 政治学科2年)による「日本の若年層を中心とする対中世論改善の可能性」が選ばれました。また、優秀賞3本、特別賞4本もそれぞれ選ばれました。

今回「大学院生の部」の最優秀賞には残念ながら該当作品はありませんでしたが、優秀賞には劉毅(リュウキ)さん/盤大琳(ハンダイリン)さん(中山大学外国語学院日本語言語文学研究科修士課程2年)による「中国における2020年東京五輪に関するネット世論の研究—ウェイボー内容の感情分析に基づき」など3本に加え、特別賞3本もそれぞれ選ばれました。

中国の大学から応募して受賞した上位4人の皆さんには、2020年3月26日(木)に東京で開催予定の「表彰式・若者シンポジウム」への招請状を送ります。(日本日中関係学会の会員を中心とする有志の皆さまからの寄付を有効活用させていただき、国際航空運賃・宿泊費は、主催者が全額を負担します)。

応募数は第1回の合計12本から、回を重ねるごとに増え、今回はこれまでで最も多い応募数となりました。今回目立ったのは、昨年に続き、中国国内の大学からたくさん

応募があったことで、「大学院生の部」では2年連続して受賞者全員が中国人学生という結果となりました。次年度以降も、日本人学生の奮起を望みたいと思います。

論文のテーマが多様化し、そのレベルも年々、向上してきました。宮本賞はいまや、日中の若者による相互理解を深め、日中のより良い関係を構築していくうえで、大きな役割を果たしていると言えます。

2020年も第9回宮本賞の募集を5月頃（例年より1か月程度募集時期を早める予定です）から募集を開始いたしますので、引き続き皆さま方の一層のご協力を宜しく申し上げます。

第8回宮本賞受賞者

<学部生の部>

○最優秀賞=副賞：10万円

▽鈴木日和(スズキヒヨリ)さん（慶應義塾大学 法学部 政治学科2年）

「日本の若年層を中心とする対中世論改善の可能性」

日本の対中世論は「安定して悪い」状況にある。この現状を改善する上でのカギとなるであろう若年層を中心に、日本人の対中イメージの形成と変化の可能性を考察。ニューメディアの言論空間の影響が、若年層を中心に対中世論を緩やかな改善傾向へと向かわせる可能性を示唆。

○優秀賞=副賞：3万円

▽辜傲然（コゴウゼン）さん（上海師範大学外国語学部日本語学科4年）

「近代日本の『アジア主義』とその現代における可能性」

アジア主義の現代における可能性を探る。岡倉天心、玄洋社、大川周明、そして西郷隆盛と孫文、彼らアジア主義者の思想に共通する「生存」概念は、新たな日中関係を構築する上で重要である。

○優秀賞=副賞：3万円

▽查怡彤（サイトウ）さん（東洋大学経済学部国際経済学科3年）

「地域創生に着目した日中学生から発信する文化交流事業」

東洋大学経済学部の「佐渡市新穂潟上集落持続可能地方活性化の日中両国学生参加型エコツアー」に参加した自らの体験をもとに、日中学生が共同生活し、地域創生事業を企画、体験することで、双方が異文化を柔軟的に理解し、情報発信が可能となった。この経験が将来のグローバル人材の育成につながる。

○優秀賞=副賞：3万円

▽橋本 紗弥（ハシモトサヤ）さん、岩淵晶（イワブチアキ）さん、孔繁羽（コウファンユ）さん、楊旻昊（ヨウビンコウ）さん、川内皓平（カワチコウヘイ）さん、柴田大成（シバタイセイ）さん、齊藤隆太（サイトウリュウタ）さん、林冠璇（リンカンシェン）さん（8名）（日本大学商学部3年）

「民泊ビジネス飛躍への示唆」

日本は民泊が増加してきたが、必ずしも順調ではない。一方、中国には民泊需要があり、最大手途家（トゥージア）では貸す側を企業が担う。同社の経営手法を取り入れることで日本の民泊が発展する可能性を提案する。

○特別賞=副賞：図書券（5000 円相当）

▽向宇（コウウ）さん

（海南師範大学外国語学院日本語専攻 2019 年 6 月卒、九州外国語学院東京校）

「日本マンゴー産業のブランド化を例に—海南マンゴー産業発展の考察」

海南省は中国最大の熱帯作物の産地だが、マンゴー産業の発展には品種が単一、産業パターンが柔軟さに欠ける、標準化程度が低い、サービス体系が整っていないという 4 つの課題がある。農産物ブランド化の経験を持つ日本を手がかりに、その改善方法を検討した。

○特別賞=副賞：図書券（5000 円相当）

▽王潤紅（オウジュンコウ）さん、高慧（コウケイ）さん、田原（デンゲン）さん

（3 名）（湖南師範大学外国語学院日本語学部 3 年）

「中国における日本映像ファンサブの現状調査」

ファンサブは、ファンが映像コンテンツに自発的に字幕をつけたもので、「オフィシャルサブ」（公式字幕）と違って、趣味的性格が強い・政治の影響が少ないなどの特徴がある。ファンサバー・視聴者・ファンサブのサブカルチャーという三つの視点から、中国における日本映像ファンサブの現状調査を行い、背景・原因を解析する。

○特別賞=副賞：図書券（5000 円相当）

▽末次礼奈（スエツグレナ）さん、森山凌平（モリヤマリョウヘイ）さん、川辺瑠美

（カワベルミ）さん、小嶋巴幾（コジマトモキ）さん、王錦濤（オウキントウ）

さん（5 名）（明治大学経営学部 3 年）

「製造ライン自動化における多能工人材の存在意義を問う」

中国の経済発展を支えたのは豊富な労働力であったが、自動化が進む現在、多能工に存在意義はあるのか。実際に中国に行き、企業を訪問した結果を踏まえ、自動化水準に拘わらず多能工の存在意義が確認され、また多能工に求められることも高次元化していると分析。

○特別賞=副賞：図書券（5000 円相当）

▽羅静雯（ラセイブン）さん（広東工業大学外国語学院日本語学部 4 年）

「食卓上の精神」

日本に留学した 10 か月間に焼肉屋、温泉旅館、居酒屋、宴会場で働いた経験をもとに、日中の文化的な違いを分析。こうした文化的な事柄を伝えるためには、全世界で流行するショートビデオの形式で文化交流を行うことが効果的と提唱。

<大学院生の部>

○最優秀賞：該当なし

○優秀賞=副賞：3 万円

▽劉毅（リュウキ）さん／盤 大琳（ハンダイリン）さん（2 名）

（中山大学外国語学院日本語言語文学研究科修士課程 2 年）

「中国における 2020 年東京五輪に関するネット世論の研究

—ウェイボー内容の感情分析に基づき」

2020 年東京オリンピック・パラリンピックに対する中国における関心の度合いを、中国の SNS ウェイボー（微博）に投稿されたテキストからキーワードを抽出した上で、感情分析を実施。中国のネットユーザーのオリンピック・パラリンピックへの期待と関心の高さが判明。

○優秀賞=副賞：3 万円

▽楊亜楠（ヨウアナン）さん（早稲田大学社会科学部研究科博士課程後期 4 年）

「中国男女別定年制及びその改正に関する研究

日本の裁判例による示唆に基づいて

中国における男女別定年制における現状を4つの角度から分析。中国での裁判例2件と、日本の雇用機会均等法施行後の男女差別是正の状況を対比させ、中国での男女別定年制是正のためには、日本の事例研究が有益であると説く。

○優秀賞=副賞：3万円

▽馬雲雷（バウンライ）さん

（北京外国語大学北京日本学研究中心博士課程前期2年）

「方正県石碑事件についての一考察」

ハルビン市の衛星都市である方正県に、中日友好の象徴として1963年に建立された日本移民の共同墓地「方正地区日本人公墓」。2011年、この墓地に石碑が建てられたことで、中国民衆の怒りを引き起こす。この事件を通じ、その背景や、日中の認識の差異等を解き明かしていく。

○特別賞=副賞：図書券（5000円相当）

▽周晨曦（シユウシンギ）さん（上海外国語大学日本文化経済学院 日本近現代学専攻 博士課程後期 2018年6月卒業）

「武田泰淳の「侠女」世界——『十三妹』論」

中国文学研究家でもある武田泰淳は、中国の古典文学における重要なモチーフである「侠女」をテーマにした作品も多い。本論文では、1965年に朝日新聞に連載された「中国忍者伝 十三妹」等の作品を中心に、中国の古典である「十三妹」を題材に、泰淳が日本の読者向けに、いかに理想の「侠女」を紡ぎだしていったかを辿る。

○特別賞=副賞：図書券（5000円相当）

▽韓梅（カンバイ）さん（華東理工大学外国語学院日本語科院生1年生）

「ごみ分別で何が変わる？——“食品ロス”削減への提案」

ゴミ分別、生ごみの削減などの方法を日本に学んだ中国では、2019年7月、上海において「生活ごみ管理条例」が施行された。中国におけるごみ問題解決のためには、ごみ分別のみならず、日本が推進する食品ロスの削減と、バランスの良い食生活の実現が重要と提起。

○特別賞=副賞：図書券（5000円相当）

▽韓亦男（カンエキナン）さん

（南京大学外国語学院日本語比較文学専攻博士課程前期2年）

「中国都市ゴミ処理の課題—日本のゴミ分別に何を学ぶか—」

中国が直面するゴミ処理の現状を俯瞰し、日本との比較を行いながら、日本のゴミ分別システムから、中国が学ぶべき点を抽出。中国の国情に合致したゴミ問題の管理方法を模索する。

審査委員長：宮本雄二（元駐中国大使、日中関係学会会長）

審査委員：

<学部生の部>

大久保勲（福山大学名誉教授、日中関係学会顧問）

加藤青延（NHK解説委員、日中関係学会副会長）

国吉澄夫（元東芝中国室長、日中関係学会副会長）
藤村幸義（拓殖大学名誉教授、日中関係学会監事）
村上太輝夫（朝日新聞国際報道部記者（機動特派員）、日中関係学会理事）
村山義久（時事総合研究所客員研究員、日中関係学会評議員）

<大学院生の部>

江原規由（国際貿易投資研究所チーフエコノミスト、日中関係学会顧問）
北原基彦（日本経済研究センター主任研究員、日中関係学会理事）
高山勇一（元現代文化研究所常務取締役、日中関係学会理事）
露口洋介（帝京大学経済学部教授、日本銀行初代北京事務所長、日中関係学会評議員）
林千野（双日株式会社海外業務部中国デスク、日中関係学会副会長）
吉田明（前清華大学外国語学部日本語教員、元朝日新聞記者、日中関係学会会員）

宮本賞実行委員会：委員長＝林千野
副委員長＝国吉澄夫、村上太輝夫、川村範行、伊藤正一
委員＝内田葉子、高山勇一、三村守、方淑芬、江越眞、藤村幸義
